

昭和57年度組織的調査研究活動推進事業報告 (久米島におけるトビイカ釣り漁業)

久 貝 一 成

1 目的および内容

本県周辺海域は、豊富なトビイカ資源に恵まれており、沿岸漁業振興策の一つとしてトビイカの大巾な生産増が期待されている。しかし、実際の生産量は昭和50年の306トンから55年の118トンに減少しており、今後のトビイカ漁業の振興を図るには種々の問題点があるものと考えられる。本調査は、久米島地域におけるトビイカ釣り漁業の現状を明らかにし、同地域のトビイカ漁業を振興する上での問題点を抽出し、その対応策を検討することにより、本県におけるトビイカ漁業の発展を促進することを目的とする。昭和56～57年度の2年継続の調査で、2年次の57年度は久米島地域の現在の漁法、販路、加工等の状況について現地調査及び関連地域の調査を実施した。調査結果の詳細は「昭和57年度組織的調査研究活動推進事業報告書（久米島におけるトビイカ釣り漁業）」（沖水試資料No71）に報告したのでここでは要約を記す。

2 成果の要約

- (1) 久米島のトビイカの漁獲量は、9月以降の仲里村真泊沖漁場での量如何で豊凶が決まる。
- (2) 1日当りの平均漁獲量が20kgを超して1ヶ月に11日以上漁獲日数があれば好漁である。
- (3) 月令により漁獲量変動がみられ、月夜には少ない。これは全県共通している。
- (4) 久米島の生鮮、冷凍イカの需用量は約65トン～70トンと考えられ、その内地元で生産される量は、トビイカ36～40トン、アオリイカ1.6トン、コブシメ8.3トンである。移入冷凍イカ（ムラサキイカ、ロール・ベタ）は約20.5トンである。

県全体では、県産イカはトビイカ87トン、アオリイカ182トン、コブシメ188トンである。移入冷凍イカは約1500～1700トンと言われている。

(注) 県産イカの数量は56年の沖縄総合事務局の統計の数量

- (5) 久米島の乾燥珍味類は全て島外から移入され、さきイカ、イカ天、スライス、干スルメが店頭で約1.8トン販売され、さきイカ、イカ天で全体の74%の販売量を占める。県内に取扱われる量は約100トンといわれ、さきイカが65～70%を占めて販売されており、それらは全て県外品である。
- (6) 久米島の昭和57年のトビイカの漁協セリ取扱量は13トンで昭和56年の87%であった。反面沖縄本島南部の4漁協では好漁で、久米島が1日平均18.3kgの水揚げ量に対し、46.2kgであった。

3 問題点及び考察

沿岸域に来遊するトビイカは6月から12月頃まで漁獲されるが、その資源量は相当存在するのに殆んど未利用資源である。今後久米島はもとより県内のトビイカ漁業を振興する上では行政的な処置による価格の安定と需要の拡大のため加工業の導入育成を図る必要がある。